



明大ESS時代。ディケンズの『クリスマス・キャロル』(1981年)。左が本人

頃、日本はバブル経済による好景気の真只中になりました。また、1979

米国にて、日本語教育に託す 祖国への思い

円高に背中を押されて 米国留学を決意

私は今から約30年前に、アメリカの地で日本語教師という仕事に巡り合えたことを非常に幸運に思います。しかし、振り返ってみれば、私が遠回りをしながら最後にここにたどり着いたのは決して偶然ではなく、明治大学で過ごした4年間の原点になっているのだと思えてなりません。

中学・高校と演劇に夢中になっていた私は、1980年春、文学部の演劇学専攻に入学しました。しかし学生時代の私には、実は演劇のほかにもう一つ、大好きなことがありました。それは英語の勉強です。そこで、入学と同時に迷わず英語部(ESS)に入部し、大学時代はそこで英語劇に没頭しました。ESSは私にとって、大好きな二つのことが同時にできる理想的なところでした。

1984年に大学を卒業後、私は従業員が10人程度の輸出会社に就職しました。小さな会社でしたが、そこで輸出業務の流れをひと通り学ぶことができ、それなりにとてもいい経験になりました。

ところが、その翌年末ごろから急激な円高が進行したため、輸出業界はかなりの痛手を負いました。しかし一方で、円高のお陰で、日本人は以前より海外に行きやすくなりました。そこで私は、それまで働いて貯めた貯金を使い、思い切って憧れのアメリカに留学することにしました。それは、私の生涯で一番大きな決断でした。

米国の経営大学院に入学

私は1987年にペンシルベニア州のフィラデルフィアにあるテンプル大学の経営大学院に入学しました。この

世界へ in USA

Vol.37 —ここに生きる—



玉手 まり子さん

米国・ロチェスター大学外国語学部日本語教育専任教授

Profile

Mariko Tamate

- 1984年 明治大学文学部文学科演劇学専攻卒業
- 1984年 友愛株式会社入社
- 1987年 米国テンプル大学経営大学院入学
- 1988年 米国ロチェスター大学外国語学部日本語講師
- 1991年 テンプル大学経営大学院修士課程修了
- 2018年 ロチェスター大学外国語学部日本語教育専任教授

年に出版された『Japan as No.1』(エズラ・ヴォーゲル著)でも高く評価された「日本的経営」が世界の注目を浴びていました。

独身女性の身軽さで威勢よくアメリカの経営大学院に飛び込んでいった私は、クラスでただ一人の日本人というだけで教授や同級生たちから一目置かれ、「トヨタの『ジャストインタイム生産システム』をどう思うか」などと問われてもまともに答えられず、とても恥ずかしい思いをしました。

私にとって未知の分野である「経営学」を机上で勉強することは、とても新鮮でした。ただ、このまま経営学修士号(MBA)を取得したとしても、将来どこかのグローバルな会社で管理職として働いている自分の姿を、私はどうしても想像することができませんでした。心のどこかで、自分はビジネスには向いていないという現実に気が始めていたのです。

進路修正のきっかけになった 日本語TAのアルバイト

そんな時、転機はやってきました。2年間の修士課程のうち1年目を終了した頃、留学資金が底をついてきたので、大学内でア

ルバイトを探しました。その時に見つけた仕事は、日本語コースのティーチングアシスタント(TA)でした。まだ日本経済が絶頂期だったこともあり、世界中で日本語ブームが起こっていました。しかし、日本語教師が不足しており、テンプル大学でも当時日本語の講師はいませんでした。そのため、日本語コースといっても、学生は各自テキストを読んで文法を自習し、教室では私のようなネイティブのTAが口頭で文型練習をさせて、発音などを直すという形態のクラスでした。元来の演劇好きが再び目覚めた私は、普通に文型練習をしてもつまらないだろうと思い、特定の文型がたくさん使えるような状況設定を考えて、学生たちに即興劇のようなことをさせました。彼らがいよいよ楽しんで日本語を学ぶ姿を見て、この仕事にすっかりハマってしまいました。

日本語教授法について本格的に学んでみようとして、私は経営大学院の夏休みを利用して、ニューヨーク州のコネル大学で、日本語教授法のワークショップに参加しました。この時、同じくニューヨーク州にあるロチェスター大学から、一人の教授がこのワークショップに参加されていました。こ



教室で日本語の創作劇を発表する学生

私が長年授業に取り入れている活動のうち、学生たちに一番人気があるのは、日本のテレビドラマを

し方)に至るまで張り切って学生を指導しました。その後、バブル崩壊によって日系企業から寄付が集まらなくなったことを理由に、大使館が弁論大会の開催を一時中止するまでの約7年間で、ロチェスター大学は3人の優勝者のほか、入賞者も多数出しました。

日本語教育で祖国に貢献

日本が好景気だった時代に日本語を履修していた学生の多くは、日本語を将来ビジネスに活かすことが目的のようでした。しかし、バブル崩壊以後も、日本のアニメ・漫画・ビデオゲームなどのポップカルチャーが世界中で大人気になったおかげで、日本語履修者の数は現在に至るまで非常に安定しています。



春のロチェスター大学の芝生でくつろぐ学生たち

勉強熱心なアメリカの大学生

それからの数年間は、無我夢中でした。たとえ自分の母国語でも、人に教えるからには、まず自分自身が学習者目線になり、日本語を「外国語」として勉強し直す必要

があります。クラスで使っているテキストを前の晩に読み、翌日の授業が始まるギリギリの時間まで、どんな練習をしたら学生たちにとって楽しく、また効果的かを考える毎日でした。

私は中級と上級のクラスを任されていたが、当時ロチェスター大学にいらした言語学者・北川善久教授の「初級日本語の授業も毎回見学させていただきました。そのお陰で、私は今まで何も考えずに使っていた母国語について、「なるほど！そうだったのか！」と毎回目から鱗が落ちるようなことをたくさん学ばせていただきました。

アメリカの大学、特にロチェスター大学のような私立大学は、日本とは比較にならないほど学費が高いです。多くの学生がローンで学費を払っており、卒業と同時に日本円にして数千円円の借金を負います。そのため、学生たちは少しでも元を取ろうと必死に勉強しています。ですから私も手を抜けません。演劇の知識を活かし、それなりに楽しい授業をやったつもりでしたが、最初の数年間は学生たちによく叱られました。「せっかく漢字を習っても、それが使えるような宿題が出なきゃ意味ないです」「一

使った練習です。教室で『のだめカンタービレ』などの人気ドラマを見ながら、彼らは私が用意したスクリプト(台本)の空白部分を聞き取って埋めていきます。この活動によって、聞き取り能力が飛躍的に向上するほか、基礎的な文法の知識をもとにしながら日本語の生きた表現を味わうことができます。

例えば、ドラマのあるシーンで、きれいな好きな主人公(男性)の部屋に、彼に好意を寄せる隣人(女性)が突然訪ねてきます。彼女は部屋が汚い上、お風呂にも毎日入りません。そんな彼女に、彼は「お前臭い！風呂に入ってこい！」と言い放ちます。そのことについて、学生の中には「女性に臭いと言っるのはひどいです」「でも、本当に臭いなら仕方ないです」などと言う人もいますが、洞察力の鋭い1人が、「でも、彼は風呂に入って『こい』と言いました。『帰れ』じゃなくて、風呂に入ったらまた来てくれという意味だから、実は彼も彼女のことがちょっと好きなんじゃないの?」と言って、クラスを盛り上げてくれます。

私が日本語教師をしていて一番うれしいことは、最初に基礎的な文法をしっかり学



全米日本語弁論大会(1995年)。前列中央が優勝したロチェスター大生

学期間に試験が2回だけじゃ、習っていることが身に付きません。もっと頻繁にテストをしてください」

にも講師の私に対して、学生の分際でダメ出しするとは生意気な、と腹も立ちましたが、彼らの言いはもつともです。アメリカ生活が長くなるにつれ、相手が誰であろうと、正当な批判であれば謙虚に受け止めるという態度が身に付いてきました。それに、アメリカの学生は言いたいことも言う代わりに、こちらが誠意をもって対応したことについてはちゃんと評価してくれます。

私がロチェスター大学に着任した頃、毎年ワシントンDCで全米学生日本語弁論大会(在米日本大使館主催)がありました。私は明大E.S.S時代に英語の弁論大会で何度か賞をもらったことがあり、その経験を活かして、原稿の構成からデリバリー(話

んで土台を固めた学習者が、4年間で日本語の微妙なニュアンスまで理解できるほど成長してくれることです。そして、その教え子たちが、卒業後に何らかの形で日本と関わってくれることです。

現在、日本は少子高齢化が進んでおり、日本語と日本人の心を理解してくれる外国人労働者は、今後ますます大切な存在となるでしょう。私は日本から遠く離れた地球の裏側にいても、日本語教育を通して、少しでも愛する祖国を支え続けたいと心から願っています。



ロチェスター大学卒業式にて日本語専攻の卒業生と